

第32回夏期福音特別集会 第1回集会（伊東）

即行の福音

――マルコ伝第1〜3章――

1985年7月26日

小池辰雄

百行一死に如かず 罪の赦しの中へのバプテスマ 時は満ちた 神の国は近づいた 行為をもつて身証せよ 直ちに福音 信行一如 始めに行為ありき 聖霊の権威 キリストの無者十字架の門 キリストの新しさ 神の御意を行う者 キリストの中に（エン・クリスト）

【マルコ】

4 バプテスマのヨハネ出で、荒野にて罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣伝う。……

10 斯て水より上るおりしも、天さけゆき、御霊、鴿のごとく己に降るを見給う。

11 かつ天より声出づ『なんじは我が愛くしむ子なり、我なんじを悦ぶ』……

15 『時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』

16 イエス、ガリラヤの海にそいて歩みゆき、シモンと其の兄弟アンデレとが、海に網投ちおるを見給う。かれらは漁人なり。17 イエス言い給う『われに従いきたれ、汝等をして人を漁る者とならしめん』18 彼ら直ちに網をすてて従えり。19 少し進みゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給う、彼らも舟にありて網を繕いいたり。20 直ちに呼び給えば、父ゼベダイを雇人とともに舟に遺して従いゆけり。

21 斯て彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に会堂にいりて教え給う。22 人々その教に驚きあえり。それは学者の如くならず、権威ある者のごとく教え給うゆえなり。23 時にその会堂に穢れし霊に憑かれたる人あり、叫びて言う、24 『ナザレのイエスよ、我らは汝と何の關係あらんや、汝は我らを亡さんとて来給う。われは汝の誰なるを知る、神の聖者なり』……

29 会堂をいで、直ちにヤコブとヨハネとを伴いて、シモン及びアンデレの家に入り給う。30 シモンの外姑、熱をやみて臥したれば、人々ただちに之をイエスに告ぐ。31 イエス往きて、その手を取り、起こし給えば、熱さりて女かれらに事う。

32 夕となり、日いりてのち人々すべての病ある者・悪鬼に憑かれたる者をイエスに連れ来り、33 全町こぞりて門に集まる。34 イエスさまさまの病を患う



多くの人をいやし、多くの悪鬼を逐いだし之に物言うことを免し給わず、悪鬼イエスを知るに因りてなり。

³⁵朝まだき暗き程に、イエス起き出でて、寂しき処にゆき、其処にて祈りいたもう。……

⁴¹イエス憫みて、手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給えば、⁴²直ちに癩病さりて、その人きよまれり。

【マルコ2】

⁸イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟りて言ひ給う『なにゆえ斯ることを心に論ずるか、⁹中風の者に「なんじの罪ゆるされたり」と言うと「起きよ、床をとりて歩め」と言うと、いづれか易き。¹⁰人の子の地にて罪を赦す権威ある事を汝らに知らせん為に』——中風の者に言ひ給う——¹¹『なんじに告ぐ、起きよ、床をとりて家に帰れ』……

¹⁷イエス聞きて言ひ給う『健やかなる者は、医者を要せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪びとを招かんとて来れり』……

²²誰も新しき葡萄酒を、ふるき皮袋に入ることとは為じ。もし然せば、葡萄酒は袋をはりさきて、葡萄酒も袋も廃らん。新しき葡萄酒は、新しき皮袋に入るるなり』

【マルコ3】

²⁷誰にても先ず強き者を縛らずば、強き者の家に入りてその家財を奪うこと能わじ、縛りて後その家を奪うべし。²⁸誠に汝らに告ぐ、人の子らの凡ての罪と、けがす瀆しとは赦されん。²⁹然れど聖霊をけがす者は、永遠に赦されず、永遠の罪に定めらるべし。……

³¹ここにイエスの母と兄弟と来りて外に立ち、人を遣してイエスを呼ばしむ。³²群衆イエスを環りて坐したりしが、或者いう『視よ、なんじの母と兄弟と姉妹と外にありて汝を尋ぬ』³³イエス答えて言ひ給う『わが母、わが兄弟とは誰ぞ』³⁴かくて周囲に坐する人々を見回して言ひ給う『視よ、これは我が母、わが兄弟なり。³⁵誰にても神の御意を行うものは、これわが兄弟、わが姉妹、わが母なり』

●百行一死に如かず

皆さん、よくいらつしやいました。「一日千年」といいますが、非常に短いたった三日間ですけれども、その内容を皆さん自身が永遠的なものにしていただきたい。

キリストの譬話に、招かれた者が何のかんのといろんな理由があつて、来なくなつて、



とうとう一人も来ない。しかたがないから、

「籬の外から何でもいいから中に入れろ。天国はそんなもんだ」

という凄いお言葉がありますが、いわゆる聖国の子らが嘆きはがみする。

「アブラハムの裔^{すえ}なんて言ったってダメだ」

と。福音は、いかなるこの世の理由をも蹴飛ばして出て来なければダメなんです。どうなつたっていいんです。

「瞬間をつかまえる者は本当の人間だ」

とゲーテも言いましたが、この三日間はそういう瞬間です。借金してでも出て来ていい。学生は金があれば、一昼夜歩いてでも出て来ていい。キリストの福音というのはそういうものだ。生命賭けというのは文字通りそうなんです。

今回はマルコ伝の中から、四か所、マルコ伝らしいところを選んでお話します。福音書の中ではマルコ伝が一番土台になっている。1章から3章までの間で、しかるべく導かれてお話をいたします。

^{そくぎょう}

「即行の福音」と題した。こんな題は私は初めてです。マルコというのは別の名前はヨハネとも言う。ペテロのお弟子さんです。従兄弟にバルナバがいました。ペテロの伝道に伴って行つた。それは使徒行伝13章をご覧になると分かります。ペテロがマルコに口授したわけです。これを口伝えで、マルコが筆記した。だから、これを「ペテロの福音書」とも別名言われるくらいです。大体、ローマのクリスチャンを相手にしたらしい。ユダヤのいろんな習慣や地名など、預言者のことなど、大分わかるように書いてある。ただし、マルコ伝では、キリストの言葉、教え――いわゆる「教訓」――これは極めて少ない。

著作集第一巻の『無者キリスト』、あれはぜひ読みかえしてください。マルコがキリストの行為面を非常によく書いた。ルカ伝は心の面。マタイ伝は言葉。ヨハネ伝は霊。行、心、言、霊と、おおざっぱに言うのと、そんなわけです。マルコ伝は、芸術でいうと彫刻の世界です。非常に立体的に目に見える。ルカ伝は絵画的な世界。マタイ伝は詩的な世界。ヨハネ伝は音楽。そんな感じがします。

「神の言はその奥の響きだ」

と私はよく言うでしょ。響きの世界は、芸術の中でも音楽は、ある意味において最高かも知れません。

私は『エン・クリスト』誌(21号)に書いた。

「百聞一見に如かず、百行一死に如かず」

と。「行」の極まるところは「死」です。一番人間を打つものは、この「行為」なんです。「何を言ったか」じゃない。「何をしたか」です。福音の土台は行為である。私はいわゆる観念プロテスタント・キリスト教には反対です。「愛」なんていったって、感情だけではどうにもならない。愛も行為でなければダメなんだ。



● 罪の赦しの中へのバプテスマ

バプテスマのヨハネ^い出で、荒野にて罪の赦^{ゆるし}を得さする悔改^{くいあらため}のバプテスマを
宣^{のべつた}伝^{つた}う。

1章4節に、「罪の赦しを得さする」という訳がしてありますが、原文でいいますと、

「罪の赦しへの悔改めのバプテスマ、罪の赦しの中へのバプテスマ」

です。「悔改め」は、申し上げているとおり、「回帰」です。回心よりもっと行為的なんです。回心は心の世界。回帰――回り帰る――^{めぐ}全身で帰ることが本当の悔改めなんです。

キリストの許に^{もと}、神の許に全身をもつて帰っていく。これが行為です、全身の行為です。坐っていて「ただ心で」なんてな、そんな世界じゃない。身体ごと動いて行く。その中に入っていく。罪の赦しの中へ入っていく。だから、罪の赦しの中へ入る。この場合は水の中に入るんだ。そういうバプテスマ。

ところが、入るけれども、なかなか人間というものは、また戻って来たり、行きつ戻りつなんて、本当の回帰はできない。私たちはできるような顔しているけれども。

本当の回帰をしたのは、このキリストだけです。ヨルダンの小川でキリストは本当の回帰をなさった、我々のために。彼は、帰り行く必要はないんだけど、必要がない人が実は最も素晴らしい回帰をなさる。その回帰が本ものであると、聖霊が臨む。他の連中は、いくらここでもつてバプテスマを受けても、聖霊が臨まない。キリストだけに聖霊が臨んだ。キリストの回帰がいかに本ものであるかということが分かるわけです。

本当に神さまの中に帰った。水の中に入ることは、神の中に入ること。キリストは中に入ると、全く自分を

「我れ無き者」

にしてみましたっているわけです。それだから、私は「無者」という。完全に無我、無私です。キリストが水の中に溶け込んでしまつて、どこにキリストがいるか、というようなわけだ。そして、水から上がっていらつしやると、聖霊が鳩の如く臨んで天から声が出た。

「汝はわが愛^{いづく}しむ子なり、我なんじを悦ぶ」

と。完全に帰ったから、神さまは悦んだ。いい加減な帰り方ではしょうがない。これはみんな――模範を示したんじゃない――我々の為^{ため}に代わつて、回帰したんです。

「本当に回帰すると聖霊が臨むぞ」

ということですよ。それでは、

「困つたなあ、我々は本当に回帰するためにはどうしたらいいか」

と、その問題はもう少し後まわしにします。

10 ^か斯^かて水より上るおりしも、天さけゆき、御^み霊、鵠^{はと}のごとく己^くに降^{くだ}るを見給^{みたま}う。

この「天さけゆき」という言葉が凄い。霊的な現象です。これはイザヤ書にも出ている。イザヤ書64章1節、



「願くはなんじ天を裂きてくだり給え。なんじのみまえに山々ふるい動かんことを」（イザヤ64・1）

「天を裂きてくだり給え」

という。天を裂きて聖霊がくだって来た。

「かつ天より声出づ『なんじは我が愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ』」

本当に降参してくださいよ。本当に降参すると、キリストの愛が伝わってきます。絶対にこつちの資格じゃない。

「参りました！」

と。人に何と言われようと、いっこう差支えない。神さまの前に、キリストの前に本当に降参すると、

「我なんじを悦ぶ」

と言われる。

私は聖霊の体験をする前は永いこと、そういうことは分からなかった。ちょうど20歳の時に信仰に入って——それが1923年だ——それから1950年まで、26、27年。聖霊の火花が、時々多少散ったように思う時はあつたけれども、本当に全身が満たされて聖霊に撃たれたのは1950年の秋の11月の3日、手島さんと一緒に集会をした時です。聖霊が天界から来た。坐っていて、身体がグーッと上がったからね。それが

「天さきて聖霊が臨んで」

全身が霊にしびれてしまう。とにかく、凄い現実なんです。聖書の、ことに福音書の現実は、のんきな顔して読めない。

●時は満ちた

15『時は満ちり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』

「カイロスが満ちた」

というのは、別な言葉でいうと、

「ユダヤ教は行き詰まった」

ということです。今、時は満ちた。キリスト教は行き詰まりました。ユダヤ教じゃない。一般にキリスト教は行き詰まっている、ヨーロッパが。ヨーロッパの神学もダメだ。

私が『無の神学』なんて書いたって、誰もこれを受けとらない。いいんだよ。本ものはそんな簡単に受けとられない。

「時は満ちた」

とはそうなんだ。行き詰まった時が、「時は満ちた」なんです。

「八方塞がりだと、天界が開けているぞ」

というのが「時満ちり」です。大分みなよくなつて準備がよく出来たから、それで「時が



満ちた」と、そんなんじゃない。

「もうどうにもならなくて行き詰まった」ということ。

今、正直、世界は行き詰まっている。第三次戦争が来たらどうなるんですか。何のかんの言いながら、結局ものすごい核軍備の競争でしようが。恐ろしいね、レーザー光線で何かするとか。

「人類は亡びるから軍備はよそう」

と、大政治家がなぜそれを言えないか。何が大政治家か。リンカーンやグラッドストーンみたいな大政治家なんか一人もない。

●「神の国は近づいた」

「神の国」とは、神さまの支配する所、天国。マタイ伝ではよく「天国」と書いてある。

「終末は近づいた」

と言ってもいいわけです。とにかく、新約聖書は終末時において書かれたところの、福音書であり、パウロ、ペテロ、ヨハネの書翰であり、黙示録である。そして、キリストはこの行き詰まりの所に天国の核を、中核を現じた。天界をそこに本当に現じたんです。だから、

「天国は近づいた。いや私は今、天国をお前たちに、十字架にかかるまで見せてやるぞ」

と、こういうことです。福音書はその新天新地の相がそこに時間を越えて投影されているわけです。黙示録は凄いけれども、福音書は黙示録が指しているところを、実はちゃんと現実に現している。キリストというひとは大変なひとです。お釈迦さんだつてとてもかないやしない。東西古今ただ独りのひと。悟りじゃないんだ。現じただ、天国を…（異言）…福音の中に信住する。そういう世界です。新約聖書の少し安いのを買って、福音書のところだけ破ってポケットにでも入れて、電車の中でもどこでも読んで、いつも天国にいてくださいよ。

「私は天国人でござる。この世に、このどうにもならない世の中に、天国を現じてやるぞ」

と。私たちはそれだけの使命を持った一人一人なんです。キリストは体現しました。我々もまた、我々を通して、キリストの力が体現しないことには。それは、正に「行」の世界で、福音はそのような行であるということ、私ははつきり今回は言いたい。

「信仰によって義とされる」

なんて、そんなお題目を言っている世界じゃない。

「行じない者は空しい」

とキリストは言っている。今私が言っている「行」はいわゆる「信仰と行為」なんて、そ



んな分けていった行為じゃない。

「まあ信仰はだいぶよくなつたからこれから行為しましょう」

と、そんな行為がなんの行為か。もう、私は言葉にならないです、正直。

「なんじら回帰せよ。私の所に帰ってきて、福音を信ぜよ」

も、「エン」（の中に）という字が使つてあつて、

「福音に在つて信ぜよ。福音に信じ生きろ、信じ住め」

ということだ。そういう訳を私は大胆にしたい。そんな言葉はない、新しく作つたんだ。

「福音の中に信住する」

と、ギリシャ語も三格の使い方がしてある。

「福音に信住していてももらいたい。福音に生きて居れ」

ということだ。本当に生きていようと。「信ずる」という言葉がどうも躓きになつて困る。

●行為をもつて身証せよ

16 イエス、ガリラヤの海にそいて歩みゆき、シモンと其の兄弟アンデレとが、

海に網投ちおるを見給う。かれらは漁人なり。17 イエス言い給う『われに従

いきたれ、汝等をして人を漁る者とならしめん』

「お前たちを人を漁る者にするぞ、伝道者にするぞ」

と。私ばかりが伝道者じゃない。あなた方一人一人みんな伝道者です。マルチン・ルタ

ーの宗教改革を、もうひとつ我々は改革しなければならない。

「隣人に行為をもつて語れ」

というんです。それが本当の伝道者です。口で福音を説明するんじゃない。

「行為をもつて語れ」

とは、

「行為をもつて身証せよ」

ということ。

「福音とはそういうもんですか」

と、その人の行為をみて福音が伝わっていく。

親の教育も先生の教育も、率先垂範という言葉があるけれども、その先生の、親の生き方が自然に子供に伝わっていく。それが一番本当の教育の仕方です。

「怠けるな、勉強せよ」

なんていくら言つたつてダメなんだ。却つて罪を刺激する。

「よく勉強するねえ」

と言つてやる。まだしてないのに、よくするねえと。

「それは悪かつた」

と思つて勉強する。

「あの先生はやっぱよく勉強しているなあ、よし私もやらなくては」と、こうならなくては。先生が本当に勉強しているかは講義を聞いていれば分かる。また、その先生の熱意を持った語り方で分かる。

私は、小学校から大学まで思い出すと、そういう熱意をもつて、全身をもつてやっつてくださった先生は、やっぱりいつまでも恩を感じて思い出します。特に、小学校の校長先生は素晴らしかった。月曜日の朝の講堂修身という、20分か30分、みんな全校生徒が立って聞いていた。みんな吸いこまれるように聞いていた。私は中身はもう忘れてしまったけれども。本当に情熱を傾けていたね。

とにかく、そういった実存そのものが、行為そのものが、本当の教育になっていくわけです。日教組なんてのは一番困る。日本の教育を害する。大体、教員が俸給が少ないの多いのと騒いでいるのは、何やつているかというんだ。冗談じゃない。

●直ちに福音

¹⁸ 彼ら直ちに網をすてて従えり。

この「直ちに」という言葉が、マルコ伝に41回出てくると学者が調べた。それくらい「直ちに」という言葉がある。だから、これを「直ちに福音」という、^{そくぎょう}即行の福音なんです。ギリシャ語で「ユーテオス」或いは「ユートウス」という字ですけども。直ちに、直ぐ網を棄てて従った。ということは、直ぐ行為に移るわけです。

「先ず考えてから、一、二、三日考えてから、一週間たってから」

なんていうんじゃないんだ、福音は。聞いたら、直ちに。キリストに聞いたなら、

「直ちに網を捨てて」

とは自分の

「職業を捨てて」

ということだ、彼らにとっては。

「何でもかんでも職業を捨てろ」

というんじゃない。そういうことではありませんけれども、我々が一人一人やっている事柄において、「^{そく}即」の福音を受けて、やっていることにおいて福音的な行動がグングン出て来るわけです。学問においても、何においても、全部それが「即」で出て来る。ヒルティが、

「人から手紙をもらったら直ぐ返事を書きなさい」

と言った。私はたいてい実行している。

やっぱり、「即」で、即的に動く人は仕事をする。事業家もそうじゃないですか。行動が速い。即決していく。ひらめきをもつて決断する。熟慮断行なんていう言葉があるけれども、あんまりゆつくり熟慮したってしょうがない。そのうち眠くなってくる。それは、直ぐ閃



きが来る。これは福音の非常に素晴らしいところなんです。即、行動に出る。

こういうようにして、即、キリストに従って行つた、この姿が最も福音的な在り方だ、というわけです。

「ああそうですか、それ信じます」

なんて、口でもつて「信じます」ではないんだ。

創世記の22章、アブラハムはどうしたか。

「これらの事の後神アブラハムを試みんとて、之をアブラハムよと呼びたもう。彼言う、我ここにあり。²エホバ言ひ給いけるは、爾の子爾の愛する独子即ちイサクを携えてモリアの地に到り、わが爾に示さんとする彼処の山に於て彼を燔祭として献ぐべし。³アブラハム朝つとに起きてその驢馬に鞍をおき、二人の若者とその子イサクを携えかつ燔祭の薪をわりて、起て神の己に示したまえる処におもむきけるが…」

アブラハムは何も返事はしないんだ、さつそく行動に移つた。

「アブラハムは行為によつて義とされた」

とヤコブ書に書いてある。それがこれです。

「アブラハムは信仰によつて義とされた」

とパウロは言つた。パウロが言つた「信仰によつて」と、ヤコブ書の「行為によつて」も本当は同じことなんだ。ルターが、ヤコブ書を「藁の書翰」と言つたのは、ヤコブ書の読み違いだ。ルターもパウロもあの時は、どうしても「信仰」一点張りで言わざるを得ない時だったから、大いに「信仰のみ」と言つた。けれども、パウロもルターも最も行為的な人ではないですか。「信仰のみ」と言つた人が最も烈しい行為をした。パウロはあの世界伝道を、コリント後書11章に書いてあるあれほどの沢山の困難を突破したでしょ。ルターも、

「いつ焼かれて殺されても構わない」

と言つて、ウォルムスに出かけて行つたでしょ。

●信仰一如

これは、信仰が本ものだから。信仰一如です。パウロにしても、ルターにしても、この信という世界が、全存在的に受けとる世界なんです。頭で信じたんじゃない。全存在的に体受することは、烈しい「内的な行為」なんです。はげしい内的な行為が、即、外的な行為として出て来る。そういうことをはつきり、なかなか言わない。

私もさんざん非行為的な人間だったけれども、とにかく、35、36才から集会を始めた。

私は時々言うでしょ、

「二年かかって一人でいいから本当にひっくり返してみろ。そして連れて来なさい」

と。どうだな、連れて来たかな。それだけの迫力をもつて迫っていけば、人は動くんです。



自分の中で、本当にキリストが生きてしょうがないんだ。そうすれば、その行為は、全存在をもつて語っているのは、言葉だつて行為ですよ、ある意味においては。

親鸞が諸国を歩き回っていた。北の方に行つて、ある晩に越後の柿崎に泊まった。その宿屋の亭主がひどい男で、なかなかろくな扱い方もしてくれなかった。けれども、親鸞は炉端でほだをくべながら、法門を説いた。夜がだんだんふけていった。話がだんだん佳境に入った。始めは、うるさいなあと思つて聞いていた亭主がいつしかしくしく泣き出した。南無阿弥陀仏と言つて、涙まじりに声を出す。

「柿崎にしぶしぶ宿をとりつるをあるじの心熟したりけり」

と――ここは柿崎だから、しぶ柿が熟したように――言つたという一つの挿話があります。が、本当にそうです。お客さんが来て、しゃべっているうちに、知らない間に福音の話になつてしまつて、私も時々それをやる。喜んで帰つていく。喜んで帰つていくけれども、集會に来ようとまでする人は、なかなかいない。たまにはあるけれども。

とにかく、福音はもう遠慮している時ではない。世は末ですから。学生でも友人に、社會にでも会社の人に。いわゆるお説教式な話し方はダメです、もちろん。

「隣の人に、この人に福音を語つてやろうかな」

と、ちよつと見れば分かる。そしたら、チヨコレートでも出して、

「どうですか……」

と、一緒に食べながら（笑）。まず、チヨコレートの行為から始まるんだ。そういうのが伝道なんですよ。

「福音とは……」

なんて、七面倒臭いことを言つたつてダメだよ。まあ、そういうことで、もう少し八方破れの的にやつてください。

● 始めに行為ありき

少し、ゲーテの言葉を引用しよう。

「始めに言ありき」 (Im Anfang war das Wort.)

とある。それを、ゲーテは、ファウストをして訳させながら、霊の閃きでもつて、

「始めに意があつた」 (Im Anfang war der Sinn.)

と訳した。そうやっているうちに、一体、「いころ」というものは一切に作用し得るであろうか。「意味」というものではまだダメだ。あ、そうだそうだ、

「始めに力があつた」 (Im Anfang war die Kraft.)

と、こう訳すべきだ。そう書いてあるうちに、そこに留まつてることができないように、何か閃きが来て、霊（ガイスト）が私を助けて、ついに落ち着いてこう書くことができるようになった。



「始めに行為ありき」(Im Anfang war die Tat.)

と。福音は最初は「行為」だということです。

モーセの十誡が与えられる前に、出エジプトという驚くべき行為を神さまはさせた。力ある恵みの行為をもつて、イスラエルの民を出エジプトさせた。それから、

「お前は私の民である」

という契約をする時に、その保証として、ある一種の条件として、「律法」を与えた。

「これを護るならばいつでも我が民である、護らなかつたらダメだぞ」

と。律法というのは、そういう神さまの要求をもっているわけです。

本当は、「言・意・力・行」は四相一貫なんです。そこまで、彼は言っていないけれども。

●タート・ウム・タート

『ウィルヘルムマイスター』の終わりの方の「遍歴時代」という中に素晴らしい言葉がある。第三巻の第一章のところに、

「汝、この人生において何事をも後に延期してはいかん。行為また行為であれ。」

"Du im Leben nicht verschieben, Sei dein Leben Tat um Tat."

即やれと。明日もあるから、なんて思ってはダメだ。あつ今日はまだやってない、と思つたら飛び起きて、そしてやってから眠れと。

「明日がある、明日がある、今日ばかりじゃないと、いつも怠け者は言っている」

"Morgen, morgen, nur nicht heute, sprechen alle faulen Leute."

という、そういうことわざがある。何事をも延ばしてはいかん。

「汝の人生は、行為また行為（タート・ウム・タート）であれ」

と。それだから、ゲーテという人はあれだけの大変な著作を――ゲーテ全集は一四三巻だよ――よくも書いたなあと思う。驚くべきものだ。ちょうど私と同じくらいの年配だ。私の何倍書いたか分からない。大変な人です。

何も書くことばかりがいんじゃない。行為そのものが文字なんだ。超一級の人物は何も書かない。ソクラテスも孔子も、キリストもお釈迦さんも何も書かない。みんな弟子どもが書いている。あなた方、何も書かないと、お釈迦さんやキリストと同じことになる(笑)。私なんかダメだ。

生活そのものが文字、生活そのものが「活字」という。それが活きた文字、活字です。

「生活そのものが活字であれ」

ということですよ。

「汝らは活ける書なり」

とパウロが言ったでしょ。キリストの活ける書である。

我々自身が聖書の続巻である。あなた方自身が使徒行伝の続きを書いている。その文字



は天界に映っている。神さまの巻物の中には、それは書いてある。地上の歴史なんていうものはあてにならない。神の巻物に書いてあるのは、これは本ものだ。黙示録に書いてある通り、神の巻物に記されてある。神さまは下らないことは書かない。その人の本ものところだけを書く。悪いところは神さまは消してくださるんだ、キリストの恩寵で。

「お前のここだけは本ものだった」

と。それが

「汝の生涯は、行為また行為（タート・ウム・タート）であれ」

ということです。福音はそのような、源行的なもの、根源的な行だ。「ウルタート」という。いわゆる派生した行為ではない。全存在的な行為です。楽しいですよ、そういうようになつたら。明日から——今からだ、即だから——即、そのように生きてください。そうしたら、楽しくなる。何か知らんけれど、力が出て来るから。それでは、その行為ができるかということ、力んだつてできない。

●聖霊の権威

21 斯て彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に会堂にいりて教え給う。

22 人々その教に驚きあえり。それは学者の如くならず、権威ある者のごとく
教え給うゆえなり。

これも「直ちに」です。人々はその教えに驚いた。「権威ある者のごとく」ではない、
「権威ある者らしく」

語り給うた。「ごとく」ではない。真似しているんじゃない。聖霊が来ると、権威なんて考
えなくたつて、自然に権威が出てくる。ヒルティーの書いているものになぜ権威があるか
というと、彼は聖霊の角度から書いているからだ。

23 時にその会堂に穢れし霊に憑かれたる人あり、叫びて言う、24 『ナザレのイ
エスよ、我らは汝と何の関係あらんや、汝は我らを亡さんとて来給う。われ
は汝の誰なるを知る、神の聖者なり』

「関係あらんや」どころのさわざじゃない、本当は。大きなかわりがある。悪霊という
奴は、とにかく霊の世界は見えるんだ、相手が神の子であることが。普通の人には分からない。
特にナザレの、キリストを一番肉的に知っている連中は、キリストが分からないから、
「なんだ、この頃変なことを言ったりやつたりしているけれども」

「預言者は故里にては容れられない。家の者は敵だ」

なんていう、キリストの言葉はああいうところから来ている。

29 会堂をいで、直ちにヤコブとヨハネとを伴いて、シモン及びアンデレの家
に入り給う。30 シモンの外姑、熱をやみて臥したれば、人々ただちに之を



イエスに告ぐ。31イエス往きて、その手を取り、起こし給えば、熱さりて女
かれらに事う。

キリストという人は、神の霊、神の力に満ち溢れた人だから、近づけばもうそれで、どうかなってしまう。手をとれば熱が去って起き上がってしまう。とにかく、大変な力を持ったひとだ。そういうキリストを本当に、眼前に浮かべるようにして福音書を読んで、圧倒されてしまうから。ビリビリして来るから。

「そうですか」

じゃない。私はなぜ元気かというと、福音書やなんかからそういう力が来るからなんです。キリストが下さるところの力はちよつと違った力だ。

●キリストの無者

だから、福音書というのは、読むのではない、食^くべるんです。

「我を食らえ、我を飲め」

と言われたでしょ。本当にキリストにぶつかっていると、「我を食らえ、我を飲め」なんです。霊的な力が正に具体的に来るんです、文字の背後から。

「手をとれば、直ちに…」

と、私も時々直ちに人を――私を通してキリストの力が働いて――癒した色々な事が既にありました。それは、こっちがぶつつぶれるからです。

「信仰がだいぶ上達したから、霊的になったから」

と、そんなことではない。ぶつつぶれて、自分がないから、キリストがあるんじゃないですか。だから、「無者」といつている。私は

「キリストの無者」

なんです、本当に。誰が何といつても、私ははつきりその事を言います。私が「何か」に、「サムシング」に、勇者になったらダメなんです。キリストが、

「信仰うすき者よ」

と言うと、今度は信仰が問題になって、

「さあ私の信仰は？」

といつて一生懸命に信仰を問題にする。ちつとも進行しないんだよ、そんなことでは。捨ててしまえばいいんだ、

「自分の信仰」

なんてものは。信仰も私しないんだ。

「何ありません」

と。そうすると、

「キリストの信」



が入って来る。キリストの信が、本願の信が入ってくる。これは大変なものです。だから私はなぜ祈り入るかというと、祈り入ってキリストの信をいただくわけです。これが、同時に霊の力ですから。「ワッショイワッショイ」と祈らなくなっている。黙って祈って、力が来るんです、ものすごく。蚊の鳴くような声だって何だっていいよ、本当に入っているのなら。キリストを身体で受けとる世界なんだ。突入と言ってもいいし、体受と言ってもいい。

●十字架の門

朝まだき暗き程に、イエス起き出でて、寂しき処にゆき、其処にて祈りいたもう。

これは力の源泉です。父の中に、父の懐に入って、祈り入る。祈り居たもう。入らなくてはいいかん。神さまの中にキリストは入って、私はこのキリストの中にまた入ってしまう。

「神・キリスト・我」

という三重の内接の円になる。

とにかく、本当にその世界に入ってくださいよ。

「自分の信仰がどうだ、聖書の読み方がどうだ、自分は少し理知的でどうだ」

なんのかんのと、そんなことはどうでもいい。全存在をそのままあるがまま、キリストの中に入れることです。

どこから入れるんですか？ 十字架ですよ。十字架という門からです。

「我は門なり」

というのは十字架の門ですから。

「お前は、全部私が贖いとった」

というその門ですから。入らざるを得ないんです。何も遠慮する必要はない。絶対恩寵の世界だから。

「過去も現在も未来も全部お前は、お前という罪びとは全部私が贖いとったから心

配要らん」

「はいっ」

と、それだけの話だ。そして、平伏して入って行く。すると、俄然、上から力が来る。

なぜ、私みたいに簡単になつてくだらないんですかね。みんな、利口すぎて困る。私みたいにバカにならないとね。本当にみんな利口だね。私は本当にバカで単純でいつまでも子供なんだ。

●行為は一切である

ゲーテも言っている。『ファウスト』の第二部第四幕の、高い山の中の瞑想のところで、



「行為は一切であつて、名誉でも何でもない」

「デイトート イスト アッレス」(Die Tat ist alles, Nicht der Ruhm.)

と書いてある。

「行為的であるということは人間の第一の使命である。本当の男はたゆみなく活動するものである」

と。それは、当時のキリスト教がいかに力がないか、ゲートルは嘆いたから、なおさら逆になんて言いたかつた。

キリストは非常に行為のことを言っておられる。

41 イエス憫^{あわれ}みて、手をのべ彼につけて『わが意^{こころ}なり、潔くなれ』と言ひ給えば、
42 直ちに癩病^{れぼい}さりて、その人きよまれり。

とにかく、即、すべて働いてしまふ。

2章には、中風^{ちゆうふう}のことが書いてある。沢山、各頁に驚くべきことが書いてある。

「^{とこ}床をとりて家に帰れ」

なんて、中風の者を癒した。

8 イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟りて言ひ給う『なにゆえ斯^{しか}ることを心に論ずるか、⁹中風の者に「なんじの罪ゆるされたり」と言うと「起きよ、床をとりて歩め」と言うと、いずれか易^{やす}き。¹⁰人の子の地にて罪を赦す權威ある事を汝らに知らせん為に』――中風の者に言ひ給う――¹¹『なんじに告ぐ、起きよ、床をとりて家に帰れ』

キリストは罪を赦す權威を持つている。そんなことは今までは分からなかつた。

¹⁷ イエス聞きて言ひ給う『健やかなる者は、医者を要せず、ただ病ある者、

これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪びとを招かんとて来^{きた}れり』

パリサイ人たちに言っているんだ。

「本当は、万人が罪びとで、お前たちは罪びとでない顔しているけれども、とんでもない偽善者だ」

と本当は言いたい、このパリサイ人なんていう者には。

「自分は健やかだなんて思っている者はどうでもいい。本当に自分は病める者であると思つている人に、私は来た」

と。どんなに健康でも、どこかは欠陥があるんでしょね。もちろん魂の世界は、みんな破れ器だ。どんなに整つたような顔してたつて、みんな本当は破れている。偉そうな顔したつてダメです。精神的にも肉体的にも破れ器です。ところが、この破れの中に、破れざるものが入つて来るんだ。破れをただ整えようとしたつてダメなんだ。破れのまんまでいから、キリストという生命を受けとると、破れの中から破れざる天衣無縫的なものが中から形成されていく。蛹^{かみかみ}がやぶれて、チョウチョが出て来るようなわけだ。キリストは私



たちの身心の、身心共に、医者なんです。

「それでは、もう医者にかからない」

なんて、何もそういう妙なかたくなな信仰じゃない。お医者さんにかかったって、薬をのんだっていい。けれども、それはただ補助に過ぎないのであつて、本当の生命はキリストから来る。その角度は絶対に失つてはいかん。ヒポクラテスは

「自然の力にたよれ」

と言った。しかし、この自然の力は、自然の中に浸透している「神の力」と言ってもいいくらいだ。ゲートはそういうようなことをちゃんと観ている人だった。

●キリストの新しさ

今までののは、旧約は古いんだ。けれども、今度は新しくなった。

22 誰も新しき葡萄酒を、ふるき皮袋に入ることとは為じ。もし然せば、葡萄酒は袋をはりさきて、葡萄酒も袋も廃らん。新しき葡萄酒は、新しき皮袋に入るるなり」

と。これは「新しき葡萄酒」です。キリストの新しいのは古びない本当の新しさです。

「今までの律法というような革袋に入れてはダメだ。福音という革袋に入れろ」

と。キリストの福音は、そういった「新しき革袋」ですから。そこにキリストという生命体が入って来る。キリストという生命の血が入ってくる。

また安息日のことが書いてある。悪鬼を追い出した事も書いてある。3章のキリストの譬話は面白い。

27 誰にても先ず強き者を縛らずば、強き者の家に入りてその家財を奪うこと能わじ、縛りて後その家を奪うべし。

なにか、強盗の奨励みたいなことを言っている。

28 誠に汝らに告ぐ、人の子らの凡ての罪と、けがす瀆しとは赦されん。29 然れ

ど聖霊をけがす者は、永遠に赦されず、永遠の罪に定めらるべし。

「聖霊に向かつて、そんなものとは言っている、これはどうにもならんぞ」

ということです。あの罪この罪を犯して滑ったり転んだりはまだいいけれども、聖霊に対して意志的に反抗したら、それはもうサタンだから、サタンは亡ぼされる。サタンになめられてはダメだよ。

「サタンよ退け!」

とキリストはおっしゃった。ルターも言ったとおり、

「白きサタン」

というのもある。見かけ上、大変よさそうな顔しているけれども、逆に、「黒きサタン」よりかなが悪い。偽善的なサタンがいる。世の中にはそういう現象がよくある。しょうがな



いね、これは。

●神の御意を行う者

キリストは、身内の者たちは別に親しくないわけではないんだけど、

³¹ここにイエスの母と兄弟と来りて外に立ち、人を遣^{つか}わしてイエスを呼ばしむ。

³²群衆イエスを環^{めぐ}りて坐したりしが、或者いう『視よ、なんじの母と兄弟・

姉妹と外にありて汝を尋ぬ』³³イエス答えて言い給う『わが母、わが兄弟と

は誰ぞ』³⁴かくて周囲に坐する人々を見回して言い給う『視よ、これは我が母、

わが兄弟なり。』³⁵誰にても神の御意^{みこころ}を行うものは、これわが兄弟、わが姉妹、

わが母なり』

キリストはただ血肉のことを言っていない。ここでも「御意を行うもの」ではないですか。ただ聞く者ではない。

「朝に道を聞くならば夕に死すとも可なり」

という有名な孔子の言葉があるけれども、道を聞いただけではダメなんです、道を聞いて行わなくては。

「神の御意^{みこころ}を行う者は、これわが兄弟、わが姉妹、わが母なり」

と。この最後の言葉が一番大事だから、ここに掲げたわけですよ。「兄弟姉妹」といったって、神の御意を行う者が、神の御意に実存している者が、本当の兄弟姉妹だ。「信ずる」とも書いてない。「聞く」とも書いてない。「行う」と書いてある。

今までの福音の掴^{つか}まえ方は、もちろん間違っているとは申しませんよ、けれども、今回は本当の意味で、行為がいかに大切なものであるかということです。ということは、行為を切り離して言っているんじゃない。そこが、カトリックはまた別な意味で、行為に躓^{つまず}いている面がありますけれども、プロテスタントはどうもそこにいくと、そこがどうかと思う。本当の意味で、生きてくださいよ。本当に生きるというのは、そのように動いていなければダメなんです、実証していなければ。行為とは、別の言葉でいうと、福音の実証です。事実をもつて身証^{あかし}していなければ。

「証しびとたれ」

ということなんです。証しびとは、ただものを言っているんじゃない。

そうしたら、もう少し極端に言うとか、

「マリヤが私の母じゃないよ、本当にマリヤがやってるのなら、母だけでも、そうでなければ、マリヤだってダメなんだ」

と、それくらいのがキリストの言葉の裏にはなきにしもあらず。

「なぜ、私を尋ねていますか。お父さんお母さん、私はここで神さまのことにたずさわっているのに」



と、12才の少年イエスが言ったじゃないですか、神殿にいた時に。あれは

「神さまのことにたずさわっている」

という言葉です。神さま、父のことにたずさわっている。もうはつきり、天の神さまが、キリストにはかけがえない唯一人の父なんだ。何も、ヨセフをけなしているわけじゃないけれども、ヨセフのことは一つも出てこない。

相対的な意味で、今の若い人たちが親を親とも思わないようなのは決して良くない。けれども、本当のお母さん、本当の兄弟、本当の姉妹は、何も血肉のことじゃないんだ。情的には、血肉の人に対する情的な近さというものは、そりや正直あります。けれども、情的な近さでなくて、本当に生命的に近いのは一緒に神さまのことをやっている人たち、神さまに於て生きている人たち。それが、親であり姉妹であり兄弟である。本当に親しい。いわゆる親戚なんて、普通はあんまりつきあいはない。ところが、あなた方は親戚以上に親しいわけだ。

●キリストの中に（エン・クリスト）

それでは、その「御意を行う」とはどういう事か。今度は、行為の本論に入るわけです。何といっても、十字架を通ってキリストの中に入らなくては。キリストの中に入って、聖霊の力をいただく。

キリストの中に本当に入る。そうすれば、力が生命が来るから、行為せざるを得ない。

そのことを、マルチン・ルターが、あの『ローマ書序文』の中で書いている。

「ところで、信仰は我々の中における神の業である。」

信仰は神さまの業です。「自分で信じた」なんていうのじゃない。

その業というのは我々を変えて神さまから生まれしめるところのものである。

ヨハネ伝第1章にあるとおり。

そして、古いアダムを殺す。

というのは、「生来我」を殺す。

我々を、心において、気分において、また思いにおいて、またあらゆる力において、全く別な人間にしてしまう。しかも、己と共に聖霊をもたらすものである。

この信仰というのは、神さまの業だからね。

おお、信仰とは何と生き生きとした、また活動的な、仕事をする力強い事柄ではないか。間断なく善きことをなさないではいられないほどのものである。それほどにまで、信仰とは力強い、いきいきとしたものである。信仰はまた次のことは問わない。善き業が為さるべきであるか、或いは為され得るか、そんなことを聞く前に、既に信仰はその行為をやってしまったている。そして、いつもその行為の中に居る。」

「絶えずその行為をやっている」



という、そういう素晴らしい言葉です。だから、ルターにとっても、信仰が本ものだと、それは動かざるを得ない、行為せざるを得ない。

「それは聖霊の力による」

ということがその中に含まれている。そうすると、信仰なんていうものは、自分で考える必要がなくなる。上からグーツと来て、神さまが御霊の力でもって働いて動くから、動かざるを得ない。

この「ざるを得ない」という世界が一番本ものの世界です。

「やろうか、やるまいか」

じゃない。やらざるを得ない、かくせざるを得ない。動かざるを得ない、人に語らざるを得ない、人に与えざるを得ない、人を助けざるを得ない、お手伝いせざるを得ない。何でもいい。そのようにして動いていく。結果はどうだって構わない。かく在らざるを得ないという。

「ざるを得ない。止むに止まれない」

という、それが本当の在り方だ。これは『言志録』の中の西郷南洲が大好きな言葉です。

そうすると、生命が^{ほとぼし}迸らざるを得ない、生きざるを得ない。疲れを知らない人になる、眠くはなつても。

「自分たちは少し力んでも、直ぐ疲れてしまうけれども、聖書の中には驚くべき源泉があつて迸ってくる」

というようなことをゲートルがちゃんと言っている。普通の人はみんな、ゲートルを見損なっている。本当に福音をつかんでいない人はいくらゲートルを読んだって、或るところまでしか分かりません。だから、私^{そくぎよう}みたいなのが言わざるを得ない。

信行、一如のその行為が、即行の福音である。即行の現実でなければ、その人は、信仰はどうかと思う。自分は本当に生きているかということは自分で分かる。人がどう思うかわないかは、そんなことはどうでもいい。自分で、私は本当に生きているか、福音を本当に生きているか、自分に問うたらいい。

あなた方がなさることは何でもいいから、生涯を通して、力強く、それを通して証してください。我々はこの点で、一歩も退いてはダメだ。非常な歴史的使命を担っているわけです。地道に、一人、二人、三人と証して伝えていく。

「一、三人わが名にあつて集まる所に、我も共に在り」

という、それを実証していただく。本当は、皆さんのこれだけの数の召団があるわけなんだ。どしどし召団をつくつてください。何も名前ばかり掲げる必要はないけれども、事実そうであつただければ、結構なんです。

